

## 第四章 三山時代の内情

### 一 「察度」という名前

前章では、いくつかの仮定を置く必要があるものの、英祖王統とは伊祖グスクを拠点としていた地方的な有力者であり、その後、玉城グスクに拠ったのではないかと想定した。では、浦添グスクを造営したのは誰かということが問題になるが、それは沖縄島に渡来した新参の勢力ではないかと考えられる。そのように考えるのには、いくつかの理由がある。

ひとつは、浦添ようどれや浦添グスクに高麗系瓦が利用されているが、それは浦添ようどれの「癸酉年高麗瓦匠造」の銘に見られるように、高麗からの瓦工の渡来を示していることである。高麗系の瓦は、単に屋根にのせればよいというのではなく、建物を建造する時から瓦をのせることを計算していなくてはならないという指摘を考えれば（高、二〇〇二）、渡来した人びとの中には建

築技術者など、高麗の多様な職能集団が含まれていたと考えられる。

いまひとつは、「サト」の音を含む王名の問題が、渡来者集団についての手がかりを与えてくれることである。

『朝鮮王朝実録』の二二九四年の記事に、中山王・察度が朝鮮に対して亡命した山南王子・承察度の送還を求める記事があり、一三九八年の記事には中山王に追われた山南王・温沙道が朝鮮で寓居し、その年に没したとある。一三九二年に高麗から朝鮮に王朝が交替したのであるから、その後、朝鮮半島に亡命する、また朝鮮半島に送還を求めるとする記事があることの意味を考えざるを得ない。なぜ山南王や山南王子は亡命先に朝鮮を選んだのか、なぜ中山王は朝鮮王朝に対して亡命者の送還を求めることができたのかという点である。<sup>55</sup>

この問題を考えるために、中山王・察度、山南王子・承察度、山南王・温沙道の「察度」「沙道」という名称に注目する必要がある。『朝鮮王朝実録』に登場する亡命した者、その送還を求めた者の名前のいずれもが「サト」という音を含んでいる。ほかにさまざまな名前を持つ王がいるにもかかわらず、これらの記事ではいずれも「サト」を名前に含む王たちなのである。

『朝鮮王朝実録』の二二九四年の記事によれば、中山王・察度が朝鮮に使者を送ったとされる。

その目的は、礼物を捧げること、朝鮮被虜人男女十二名を朝鮮に送還させること、朝鮮に亡命中の山南王子・承察度の引渡しを求めることなどである。一方、同じく一三九四年の『明実録』の記事に、山南王・承察度が明に進貢の使者を送ったとある。双方に記録される「承察度」が同一人物と

すれば、一三九四年のこれらふたつの記事は矛盾することになる。朝鮮に亡命中の承察度が明に朝貢したことになるからである。ただし、『朝鮮王朝実録』では山南王子となっており、『明実録』では山南王となっている点に大きな違いがある。ここで注目したいのは、『明実録』の底本史料（遼寧省檔案館史料）では浦添の「察度」が「查都」と記載されていることにもとづいて、この読みは「サトウ」であり、「里（里主）」（貴族の領主）というほどの意味の普通名詞であるとする見解（孫、二〇〇五）があることである。地位名と考えれば、山南王・承察度、山南王子・承察度が同時に存在してもおかしくないことになる（吉成・福、二〇〇六）。

「承察度」「温沙道」などの王名は固有名詞ではなく、普通名詞である「サト」に、それを形容する漢字を付した名称であるということである<sup>56</sup>。

また、孫薇は普通名詞「サト」の意味を「里主」の下略の「里」と解釈する。本当にそうだろうか。また、「承察度」を「大里」の当て字とする考えもあるが、どのようにすれば、「承」を「大」と読むことができるのだろうか。

この「サト」という音は、高麗時代、朝鮮王朝時代に存在した地方官で領主を意味する「使道（サト）」と同じである<sup>57</sup>。もし、「察度」「沙道」が「使道」に由来するならば、亡命者、亡命者の送還を要求する王などの名称が、すべて「サト」を含んでいることの意味を理解することができる<sup>58</sup>。これらの「サト」たちは、高麗時代に反政府勢力として沖縄島に渡来した「使道」、あるいは「使道」という地位名称を知っている人びとであり、それを自らの名前としたのではないか。高麗時代

の反政府的な勢力だったからこそ、高麗から朝鮮王朝に交替した後に朝鮮に亡命し、また朝鮮に、その送還を求めることができたと考えれば辻褄が合う。

ここまでみてくると、浦添グスクの造営を主導したのは高麗の人びとを含む勢力だったと考えられる。浦添ようどれを造営し、その中に眠る有力者も、そうした勢力を率いる指導者である可能性を考慮すべきであろう。これが、やがて中山王の王統として正史に記される察度に繋がっていく有力者ではなからうか。

ただし、高麗系瓦が使用される城塞型の大型グスクは、浦添グスクのほかに首里城、勝連グスク（一の郭）があり、これらのグスクも同一の勢力、あるいはその流れを汲む勢力によって築城された可能性がある。したがって、主城と支城という関係も考えられることから、察度王統の居城を浦添グスクと限定的に考えることはできない。首里城の造営が始まるのは十三世紀末〜十四世紀初であり、察度王が即位する一三五〇年頃には高麗系瓦を使用した瓦葺の建物がつくられている<sup>59</sup>。

十四世紀代は城塞型の大型グスクが一斉に造営されるようになる時期である。これは内的発展の結果というよりも、むしろ渡来者を含む外部からの衝撃によるものと考えた方がよいことはすでに述べた。十四世紀代に活発化する南島路も、この外部からの衝撃に大きな役割を果たしたと考えられる。

琉球の対外交流の問題を考える時には、中国や日本などとの関係が重視されるが、朝鮮半島との関係も重要であることは、古くから外間守善などによって指摘されてきた。

沖繩諸島南部の東海の洋上に、「神の島」と呼ばれ、琉球王府によって重要な聖地のうちのひとつとされてきた久高島があるが、その久高島で祭りの時に謡われる神歌（ティルル）の中に、次のような一節がある。

そうるからくたりたる世直よなわしの赤椀

そうるからくたりたる世直よなわしの黒椀

外間守善は、この歌の「そうる」について、琉球では短母音oはなく、まして二重母音の発音は非常に苦しいはずだが、久高島の人たちは、はっきりとソウルと発音していると述べる。また、赤椀、黒椀とは、祭りの時に神酒を入れたり、ご飯を盛ったりして神様に捧げる聖なる器のことで、八重山でも宮古でも、どの島においても必ず用いているが、久高島では、明らかに赤椀、黒椀のことを「ソウルから下ってきた世直よなの赤椀（黒椀）」と言っていると指摘する。そして、従来は、朝鮮半島と琉球の間の文化の伝播は非常に弱かったと考えられてきたが、この歌からはっきりわかるように、両地方間の交流は存在しており、その点にも注目すべきだと主張するのである（外間、一九八二）。交流を示す事実が、琉球国の聖地であった久高島の神歌の中に出てくることには注意してよい。ちなみに、現在のソウルの位置に首都を置いたのは朝鮮王朝を樹立した李成桂であり、当初から「みやこ」を意味するソウルと呼ばれ（漢字表記では「漢城（ハンソン）」）、音の起源だけ

を考えれば、新羅の首都「ソラボル」に由来する。

また、十二世紀に成立した『三国史記』「雑志第一」に、新羅の第二代南解王の時に「始立始祖赫居世廟。四時祭之。以親妹阿老主祭」とする記事がある。これは、妹をして宗廟の巫女にしたということであるが、大林太良が、この記事について、卑弥呼と男弟の関係よりも琉球王国の間得大君と王の関係に近いと指摘していることには（大林、一九七七a）、注目すべきである。新羅の時代に、その習俗が流入したなどというのではなく、間得大君と国王の関係のモデルにしていることも十分にありうることである。

考えてみれば、察度王に次いで即位する武寧王の名前は、現在の佐賀県かの加唐島からで生まれたとされる百濟第二十五代の王と同名である。

また、「三山時代」の描写において、中山は主権性・神聖性（第一機能）、山北は戦士性・力強さ（第二機能）、山南は豊穰性・生産性（第三機能）に結びつけられ、インド・ヨーロッパ語族の神話体系（三機能体系）を枠組みとしていることから、三山時代の伝説化の過程で、朝鮮半島から渡来した人びとの役割が大きかったと考えられることは、大林太良の議論（大林、一九八三）を引用しつつ、これまでも繰り返して述べてきたことである（吉成・福、二〇〇六／吉成、二〇一一）。高麗時代の『三国史記』において、新羅の初代の三王に三機能が割り振られて描写されていることから想定である。

さらに「万国津梁鐘」の銘文の問題もある。この鐘は尚泰久王の治世下の二四五八年に首里城の

正殿に掛着したとされ、銘文は相国寺の溪隱和尚の手になるものである。

「琉球国者南海勝地而 鍾三韓之秀以大明為 輔車以日域為唇齒在 此二中間湧出之蓬萊」で始まる銘文だが、なぜ琉球国は「朝鮮（三韓）の秀れたものを鍾め」たものとされているかという問題である（吉成・福、二〇〇六）。また、三韓が明や日本よりも先に置かれていること、琉球国が南海の勝地とされていることも、考えてみれば不思議なのである。

十五世紀代の朝鮮半島からの人の移住の問題で考えたいのは、久米村に関する記事である。

『朝鮮王朝実録』には、一四五六年に久米島に漂着し、その後、那覇で四年ほど滞在した朝鮮の船軍、梁成の見聞が記録されている。

貢船に乗って琉球国に到り、水辺の公館（天使館）に住した。その館は王都から五里余り離れた地にある。館の傍らには土城があり、百余家がある。皆、我が国（朝鮮）及び中原（中国人）がここに居住しているという。

土の城壁で囲まれた場所とは久米村のことであろう。そこには朝鮮と中国の人、百余家が暮らしているというのである。

このほかに久米村に朝鮮の人びとが暮らしているとする史料を探すことはできないが、これまで述べてきた琉球と朝鮮との関係を考えれば、十分に検討すべき史料である。<sup>60</sup>

## 二 並立する山南の朝貢主体

三山時代の中山と山南の関係について、王名（察度と承察度）がともに察度（サト）という普通名詞を含んでいること、中山と山南は同一船で朝貢し、同一の使者を派遣している場合があること、『朝鮮王朝実録』に中山王・察度が、山南王子・承察度の送還を朝鮮に求めている記事があること（二三九四年）、明の洪武帝崩御・永楽帝即位の白詔紅詔を中山に発し、山南王一列に開説することを令達したことなどの点から、中山と山南は敵対関係にあるとは考えられず、むしろ同一の社会的基盤を持っていたのではないかと論じたことがある（吉成、二〇一一）。

しかし、山南の内部を仔細にみれば、明に朝貢した勢力には、少なくとも二つの系統があり、山南における勢力間の対立をみるのできるのである。

それは「承察度」にみられるような王名に「サト」を持つ王と、すでに述べたように英祖王統ゆかりの人物と考えられる汪英紫氏、汪応祖の間の対立である。

まず、山南では山南王・承察度に追隨して山南王叔・汪英紫氏が朝貢に参入する。同時期に山南から二人の朝貢主体が現れるのである。

『明実録』によると、承察度は一三八〇年十月～一三九六年四月まで、合計七回の朝貢（元旦の慶賀使などを含む）を行っており、汪英紫氏は二三八八年一月～一三九七年二月まで合計六回の朝

貢を行っている。回数ではほぼ回数であり、汪英紫氏の朝貢時期が遅れて始まるという違いがみられるだけである。

明の洪武帝は一三八三年と一三八五年の二回にわたって山南に対して印鑑を下賜しており、山南王とともに山南王叔も王として認知していたと考えられる。ここで注目したいのは、承察度と汪英紫氏という朝貢主体が並立していることである。それは、察度系統の王と英祖系統の王叔（王とは名乗れなかった）が対立関係にあったことを示している。この対立を認識していたからこそ、二人に対して洪武帝は別々に印鑑を下賜したのである。

では、汪応祖の場合はどうだろうか。

『明実録』における冊封記事を見ると、一四〇三年三月に山南王弟として汪応祖の朝貢記事があり、その翌年に汪応祖の冊封に関する記事がある。汪応祖は承察度の「従弟」であるが、承察度には子どもがなかったため、前王の承察度によって後継者に指名され、国民をよく治めているという内容である。

こうした汪応祖の「自己申告」による記事が『明実録』に残されるのは、明に対して、あえて汪応祖が正統な後継者であることを説明する必要があったためであるという（和田、二〇〇六）。つまり、承察度と汪応祖との間には王位継承上の断絶があったのである。汪応祖は、結局、王弟としての朝貢一回（一四〇三年三月）を含めて、一四一三年八月まで合計で十二回の朝貢を行うことになる。

汪英紫氏は山南王・承察度がすでに朝貢を始めており、そこに割り込むために王叔を名乗って朝

貢を始めたと考えられる。朝貢の時期は遅れるが、汪英紫氏が対明関係において承察度と力が拮抗していたからこそ可能になった朝貢であろう。これに対して、汪応祖ははじめ山南王弟を名乗るが、それは承察度が存命中であったか、死亡後であっても王と名乗れない事情があったためであろう。

こうした経過をみると、汪英紫氏と汪応祖は承察度と敵対する勢力であったこと、汪応祖は汪英紫氏の後継者であったらしいことがわかる。承察度を取り囲むように、山南王叔（汪英紫氏）と山南王弟（汪応祖）が、前後して存在していたのである。ともに王名が「汪——」であることにも注目すべきである。

以上の推定が正しいとすれば、ともに渡来者の系譜を引くものの、英祖王統はより在地的な人びとであり、察度王統は新参の勢力であったということになる。

承察度が一三九六年を最後に朝貢の記録から消えることは、『世譜』で中山王・察度が一三九五一年十一月に薨去したとされることと符合するかのようである。その後、明への朝貢使などの中に「察都」（「察都」を含む）の名を持つ人物の存在は確認できるものの、この頃を境にして、察度、承察度、温沙道など「サト」の名前を持つ王たちは一斉に歴史の舞台から姿を消すことになる。

汪応祖の次に山南王になる他魯毎たろみに関しては、汪応祖の兄の達勃期たふちが弟王を殺害したが、諸按司が達勃期を倒し、世子である他魯毎を次の山南王にしたとする（『明実録』）。田名真之は、これは達勃期ではなく、他魯毎による王位篡奪も想定できるのではないかとしている（田名、二〇〇四）。いずれにしろ、汪応祖は王位を篡奪され、名前から見ると、英祖王統ゆかりの最後の王になるの

である。

なお、他魯毎の読みは「タルミ」であるが、「ミ」は「思い（ムイ）」から変化した敬称接尾辞であるとすれば、「太郎様」の意となる。

十四世紀後半の明への朝貢主体として中山王・察度、山南王・承察度が存在しているが、このふたりは対抗する勢力ではなく、一三九八年に朝鮮に寓居し、後に朝鮮で客死する温沙道とともに同一の勢力を構成する有力者であった。この点で、必ずしも中山と山南は敵対的な関係であったわけではない。

また、山南の地を拠点に前後して朝貢主体となる王叔・汪英紫氏、王弟（のちに山南王・汪応祖もまた同一の勢力の有力者であり、対抗する山南王・承察度と並び立つように朝貢主体になった。中山王・察度と山南王・承察度は敵対的關係にはなかったが、彼らと山南王叔・汪英紫氏、山南王弟（山南王）・汪応祖は敵対關係にあったと推定され、その点では中山と山南の対立、山南内部における対立という図式に還元できるような単純な関係ではなかったのである。

### 三 按司という名称

「三山時代」の山北から明に朝貢した王は、帕尼芝<sup>ぱにじ</sup>、珉<sup>みな</sup>、攀安知<sup>はんあんち</sup>の三人である。

このうち攀安知の読みは「ハンアンチ」であろうが、意味は不明である。しかし、「安知」が「アンジ」「アヂ」ではないかと推測することはできる（吉成・福、二〇〇六）。とすれば、「按司」に相当する名称の史料上の初出ということになる。

孫薇は、この固有名詞がのちに広く「按司」という普通名詞として使用されるようになったのではないかと述べている（孫、二〇一六）。按司とは最初から地位を表す普通名詞ではなく、固有名詞であったものが普通名詞になり、沖縄諸島全体で使用されるようになったと考えるのである。

孫薇が山北王のひとりの王の名前の一部が、その後の「按司」という言葉の起源になったと考えるのには理由がある。

従来、琉球ではじめて冊封されたのは、中山王・武寧、山南王・汪応祖の一四〇四年であると考えられてきたが、蔡温『世譜』には、洪武二十九年（一三九六）に「山北王珉薨其子攀安知立受封」（山北王である珉が死亡し、その子どもである攀安知が立ち、皇帝による冊封を受けた）とあり、琉球で最も早く冊封を受けたのは山北王の攀安知であったことに注目するからである。冊封使琉球の記録がないことから、詔書下賜の形式が取られたのだらうとする（孫、二〇一六）。『球陽』にも攀安知の冊封に関する同じ内容の記事がある。

孫は、この点から山北は「王権発祥の地」であり、はじめて冊封を受けた攀安知の名前の一部である「按司」という言葉が普通名詞として山北から沖縄島へと広がったと考えるのである。

攀安知は、一三九六年一月から合計十回の朝貢をしているが、うち五回が洪武帝、五回が永楽帝に對してである。永楽帝に對しては、一四〇三年一月にはじめて朝貢し、この時に使者は、国俗を

変えるために冠帯と衣服を下賜するようにとの要求を伝えたが、これを受けて永楽帝は礼部に命じて、国王と臣下に冠服を下賜した。永楽帝との付き合いにおいて攀安知は積極的であり、この冠服の下賜は、永楽帝から琉球に使者が派遣され、下賜や冊封が行われる以前の出来事であったという。その後、一四〇三年三月、一四〇五年四月には朝貢、一四〇五年十二月には朝貢と一四〇六年の元旦のための使者を送った。最後になるのは、それから十年ほど経った一四一五年四月であり、攀安知の使者は中山王・思紹の使者とともに馬と方物を貢いだ。

なお、最後の朝貢は中山王・思紹の行ったものであり、山北は実際には一四〇六年には滅亡していたというのが孫の考えである。その裏づけになるのは、蔡温『世譜』が、北山の歴代の四王（今帰仁、帕尼芝、珉、攀安知）の在位期間を延祐年間（一三二四～一三三〇年）から永楽四年（一四〇六）までとしており、攀安知が一四〇六年で終焉を迎えることを明記していることである（孫、二〇一六）。

また、中山王・武寧が中山王として中国の記録にあらわれるのは一四〇五年であるが、一四〇六年に使者を送った記事を最後に記録から消える。その後、思紹が何の前ぶれもなく、一四〇七年、「琉球国中山王（武寧）世子思紹」として中国の記録に現れるが、これは思紹が武寧を滅ぼしたためである。山北の攀安知が滅んだと推定される時期と一致することになる。

山北王の明への朝貢は最も遅く、明から朝貢船の下賜も行われていない。また、官生も山北だけから派遣されていないなど、中山、山南に隠れて影が薄い。それにもかかわらず、孫の指摘を踏ま

えれば、早くから明に厚遇されていたことになる。北山が王権の起源であり、攀安知の「安知」が後の「按司」の語源であるという孫の考えは、その点で十分に理由のあることである。しかし、それは結果的にそう言えることであり、山北は中山や山南に比べ、明に対して従順とは言えなかったことが、逆に明からの懐柔策としての厚遇の原因になったとも考えられる。

三山時代とは、従来、考えられてきたような三つの地域で王が分立したというような単純な時代ではない。三つの地域に区分して考えることにも意味はない。朝貢主体を仕立てるための便宜的な名称である。中山と山南には同一勢力の王が存在した時期もあり、また山南に異なる系統の王が並立した時期もある。山北は中山、山南とは異なる勢力であると考えられるが、これまでの通説とは異なり、明によって冊封されたはじめての王が存在した。

そもそも「三山」時代とはいえ、この時代に王と称する人びとは、沖縄島を三つの地域に区分した地図に表現できるような面的な領域を掌握していたのではなく、拠点的な地域、あるいは彼らのネットワークを掌握した有力者を指すと考えた方がよい。

こうしたさまざまな勢力が朝貢するに際して、その業務を一手に引き受けていたのは久米村の人びとであった。中山を中心にして、山南や山北の勢力が共同で朝貢することがあるのは、そのためである。倭寇の「受け皿」としての役割を沖縄島が担い、その利害関係の調整を久米村が行っていたのである。